北海道サケネットワーク

ニュースレター 32

'12.3.11

爪痕消えぬ東日本大災害
ふ化放流設備の状況

あれから１年が経ちました。時間では消えることのない悲しみや苦しみ、あるいは、人災とも言える原発禍でふるさとを追われ、生活を失い脅かされている人々の報道に、心が痛みます。そんな中で、サケの資源保護の現状はどうなっているのでしょうか。

今月、水産総合研究センターから発行された「ＳＡＬＭＯＮ情報第６号」に掲載された「サケマスふ化放流チーム復興支援活動」の報告からその一端をお伝えします。

サケマスふ化放流チーム復興支援活動は、 ’１１．５．１０～２０に第１次調査、同１１．７～１０に第２次調査が、北海道の水産総合センターによって行われた。調査したのは岩手県と宮城県で、福島県は放射能禍で立ち入ることが出来なかった。

調査の対象となった沿岸ふ化場の施設数と被災数、生産能力は次の通り。

	施　設　数	被　害　数
岩　手　県	２７ふ化場・３７施設	２０ふ化場・２７施設
宮　城　県	１７ふ化場・１９施設	１２ふ化場・１４施設

被害状況は、電気設備、用水設備の多くがダメージを受けていた。一方、コンクリートの飼育池はがれきを取り除けば復旧可能の状況であった。この状況から、第１次調査の結果で見込まれた生産能力は、用水復旧が出来れば次のように復旧可能の見通しが立った。

	災害前年の放流数	復旧後の放流見込み数
岩　手　県	４億３，０００万尾	２億６，２３０万尾
宮　城　県	６，５７０万尾	５，０００万尾

北海道からも次のような支援が行われた。

〔水産研究総合センターから〕

Ｂｏｘ型ふ化器	１３５台を５カ所へ
増ア式ふ化器	１８台を４カ所へ

〔根室管内増殖事業協会から〕

卵輸送箱	１０５ケを９カ所へ
浮上槽	８台を３カ所へ

１１月に行われた第２次調査では、岩手県では、大槌川の捕獲施設に整備の遅れ、田老他４ふ化場で設備搬入の遅れがあり、更に、前年を上回る来遊予想に反し、前年を４０％下回る来遊実績であったことなどから、計画の達成は困難な状況だった。

明日への希望

第２次調査が行われた１１月には、岩手県、宮城県共に次への計画が検討されていた。復旧の見通しは、岩手県では平成２５年、宮城県は平成２９年としていたが、計画は、単なる「復興計画」に留まらず、更に明日に向かって発展することを目指す計画であった。